

## 新生児モデルを用いた育児擬似体験の 母性看護実習準備学習への効果 —— 参加動機の相違による比較 ——

末 永 芳 子      原 田 な を み

本研究の目的は、母性看護実習に臨む看護学生に、新生児モデル人形を用いて育児擬似体験学習をおこない、母性看護実習の準備学習にどのように影響するのかを明らかにすることである。対象は、平成19年度3年生（体験を希望した群）と20年度3年生（全員に一律に課題を課した群）である。方法は、対児感情評定尺度調査を育児擬似体験前、体験後、実習後の3時点でおこない、母性看護実習後にアンケート調査をおこなった。結果、育児擬似体験を実施する前から「希望した学生」は、「課題を課した学生」に比較すると接近感情は高い傾向にあるが、2群ともに新生児に関わる体験を重ねるごとに接近感情は高まる傾向にある。「課題を課した学生」は、育児擬似体験をおこなうことで「希望した学生」と、回避感情に差が認められなくなる。さらに、育児擬似体験は、2群ともに母親の理解や育児への興味を持つことができ育児技術の習得に役立つ。以上より、育児擬似体験は、母性看護実習の準備学習として効果があることが示唆された。

キーワード：育児擬似体験 準備学習 母性看護実習 対児感情 新生児モデル

### I. 緒 言

現代の核家族化や少子化にともない、看護師を目指す学生たちは育成過程において幼い子どもの世話などの育児体験が少ない。そのため、子どもとどのように関わればよいか、「触れ方」だけでなく、「声のかけ方」さえも分からない学生が多くみられる。しかしながら学生は、母性看護実習の中で、「沐浴」「抱っこ」「おむつ交換」などの新生児の看護については非常に関心が高く、A大学においては実習環境として看護を体験できる機会にめぐまれている。しかし、カリキュラムの過密さから実習が開始する前に十分に演習する時間が少なく、学生は新生児（以下児と略す）と関わる際に不安を抱きやすく、また児に対して否定的な感情を抱くとき児への負担感を持つと予測される。そのため、実習前に多用目的実習新生児モデル（以下新生児モデルと略す）を用いた育児擬似体験（以下体験と略す）をおこない、児に対するイメージ化をはかり、また育児技術の習得により不安を軽減し、児に対する肯定的な感情を高め実習に臨ませることが、準備学習として必要であると考え。佐原<sup>1)</sup>ら、植村<sup>2)</sup>らは、育児体感マ

イベジーを使用した育児擬似体験演習をおこなうことにより、学生が児の理解とともに母親理解を深める上で効果があると報告している。筆者が体験を希望した学生を対象に行った調査<sup>3)</sup>でも、体験後には児に対する肯定的な感情が高まりやすく、母性看護実習に効果があることが示唆された。これらのことから、今回、母性看護実習に臨む全員の学生を対象に一律に体験学習をおこない調査した。そこで、本研究の目的は、体験を希望した学生（平成19年度調査）と一律に課題を課した学生（平成20年度調査）の対児感情および育児擬似体験に対する気づきを比較し、母性看護実習における準備学習としての効果を明らかにすることである。

### II. 方 法

#### 1. 調査対象

A大学、看護学科、平成19年度3年生27名と20年度3年生51名を対象とした。

19年度の学生は、母性看護実習に備え体験を希望した学生であり「希望群」とした。また、20年度の学生は、母性看護実習の準備学習の一環として課題

を一律に課した学生であり「課題群」とした。対象の特性は、2群ともに同じカリキュラムであり、3年次に母性看護実習を実施し、実習方法に大きな違いはない。また、2年次母性看護論の中でおむつ交換や沐浴などの育児技術に関する演習は終了している。

## 2. 調査期間：平成19年4月～平成20年10月

## 3. 調査方法：

### 1) 育児疑似体験

【体験の時期】母性看護実習開始1日～2週間前。

【体験の方法】新生児モデル（多用目的実習新生児モデル：コーケンモデル）と衣類一式を自宅に持ち帰り、2泊3日の体験をおこなう。

【体験内容】「抱く」「おむつ交換」「更衣」「添い寝」「沐浴」を1日1回以上実施する。

体験時にオリエンテーションと育児技術に関する質問があった場合はデモンストレーションをおこなう。

### 2) 調査内容

#### ①対象の背景

育児疑似体験前に、性別、家族構成、乳児の世話体験の調査をおこなった。

#### ②体験項目の時間、回数

育児疑似体験後に、抱いた時間、抱いた回数、沐浴の回数、おむつ交換の回数、添い寝の回数の調査をおこなった。

#### ③対児感情

対児感情は、花沢<sup>4)</sup>の対児感情評定尺度を用いた。調査の時期は対象学生の母性看護実習に応じて①育児疑似体験前（母性看護実習前：以下体験前とする）②育児疑似体験後（母性看護実習直前：以下体験後とする）、③母性看護実習後（以下実習後とする）におこなった。

#### 【対児感情評定尺度】

対児感情評定尺度とは、対児感情測定のための質問紙であり、「あかちゃんへのイメージ」が評定できる。質問項目は、接近項目が14項目と回避項目が14項目、合計28項目で構成されている。児を肯定し受容する方向の感情を接近感情、児を否定し拒否する方向の感情を回避感情と呼ばれる。採点は、接近得点・回避得点の2得点で求め、両項目ともに“非常にそのとおり”を3点、“その

とおり”を2点、“少しそのとおり”を1点、“そんなことはない”を0点として接近項目と回避項目を別に合計し個人得点を求める。未婚女性の20～24歳における対児感情の接近得点の平均は $24.6 \pm 7.52$ 、回避得点の平均は $9.0 \pm 6.40$ である。妥当性・信頼性については、母親だけではなく、女子大学生、助産師学生を対象とした調査においても立証されている。

### ④育児疑似体験に対する気づきのアンケート調査

アンケートの作成として、まず始めに、19年度の対象学生に、体験後に「体験をして何を感じましたか」について、実習後に「体験は母性看護実習に役に立ちましたか」についてそれぞれ自由記載の用紙を配布して回収した。その回答から体験の気づきや実習に効果があると思われる項目を共同研究者と検討し項目を設定した。各項目に対して4段階「非常にそのとおり」「そのとおり」「少しそのとおり」「そんなことはない」の4段階評定で求めた。アンケート調査は、実習終了後におこなった。

## 4. 分析方法：

2群間の対児感情の比較にはMann-WhitneyのU検定、2群の対児感情の調査時期による比較はWilcoxonの符号付き順位和検定をおこなった。2群間の体験に対する気づきの比較にはMann-WhitneyのU検定をおこなった。さらに、対児感情と体験に対する気づきはSpearman順位相関をおこなった。統計学的解析には、統計パッケージ(SPSS14.0)を用い、有意水準は5%未満とした。

## 5. 倫理的配慮

研究目的と趣旨、研究協力内容については、育児疑似体験の前に書面と口頭で説明をおこなった。研究協力の是非は個人の自由意思によるものであり、成績には影響しないこと、本研究以外の目的では使用しないことを明示した。記名に対しては、縦断的調査の説明をした上で学生自身が同じ番号を用いるように依頼し、その他については無記名としプライバシーに配慮した。研究の同意は調査用紙のアンケートの回収があったものを同意と判断した。本研究は熊本保健科学大学「疫学・行動科学研究倫理審査」を受け承認された。

### Ⅲ. 結 果

#### 1. 対象の背景

「性別」「家族構成」「乳児の世話体験」について調べた（表1）。その結果、性別の内訳は、「希望群」では男子学生3名（11.1%）、女子学生24人（88.9%）であり、「課題群」では、男子学生3名（5.9%）、女子学生48名（94.1%）であった。「家族構成」は、「希望群」では、核家族と拡大家族を含めると、家族との同居者が23名（85.1%）、「課題群」では39名（77.5%）であった。「乳児の世話体験」においては2群間において有意な差は認められなかった。しかし、乳児の世話体験がないと回答した学生が2群ともに50%以上みられた。学生が体験した項目の時間および回数の平均について調べた（表2）。その結果、「抱いた時間」は「希望群」では、 $5.2 \pm 5.4$ 時間、「課題群」では $3.7 \pm 3.7$ 時間であり、「添い寝の回数」は、「希望群」では、 $1.6 \pm 1.1$ 時間、

「課題群」では $0.8 \pm 0.4$ 時間であった。この2項目については「希望群」のほうが「課題群」より、抱いた時間や添い寝の回数がより多くみられた。「抱く回数」や「沐浴の回数」、「おむつ交換の回数」についても「希望群」のほうが「課題群」より回数がわずかに多かった。また、2群ともにほとんどの学生が「抱く」体験が多かった。さらに、2群ともに抱く時間や回数に幅があり、体験していない項目もあった。対児感情評定尺度調査の回収率は、「希望群」は100%（27/27）で有効回答数は24名であった。「課題群」は83%（93/112）で有効回答数51名であった。また、育児擬似体験に対する気づきのアンケート調査の有効回答数は「希望群」は27名、「課題群」は51名であった。

#### 2. 育児擬似体験における対児感情の変化

（表3、表4）

体験における対児感情（接近感情得点、回避感情

表1 対象の背景

調査項目		育児擬似体験	
		H19年	H20年
		希望群 n = 27	課題群 n = 51
男		3 (11.1)	3 (5.9)
女		24 (88.9)	48 (94.1)
家族構成	一人暮らし	4 (14.8)	12 (23.5)
	核家族	12 (44.4)	27 (52.9)
	拡大家族	11 (40.7)	12 (24.6)
乳児の世話体験	あり	13 (48.1)	25 (49.0)
	なし	14 (51.9)	26 (55.0)

人 (%)

表2 育児擬似体験した項目の時間および回数

調査項目	H19年			H20年		
	希望群 n = 24			課題群 n = 51		
	平均値	最高	最低	平均値	最高	最低
抱いた時間 (時間)	$5.2 \pm 5.4$	20	1	$3.7 \pm 3.7$	24	0.5
抱く回数 (回)	$12.2 \pm 7.7$	30	3	$11.4 \pm 8.6$	50	3
沐浴 (回)	$1.6 \pm 1.1$	4	0	$1.1 \pm 1.0$	5	0
おむつ交換 (回)	$2.8 \pm 1.2$	6	1	$2.5 \pm 1.3$	6	0
添い寝 (回)	$1.6 \pm 1.1$	4	0	$0.8 \pm 0.4$	1	0

表3 接近項目得点の変化

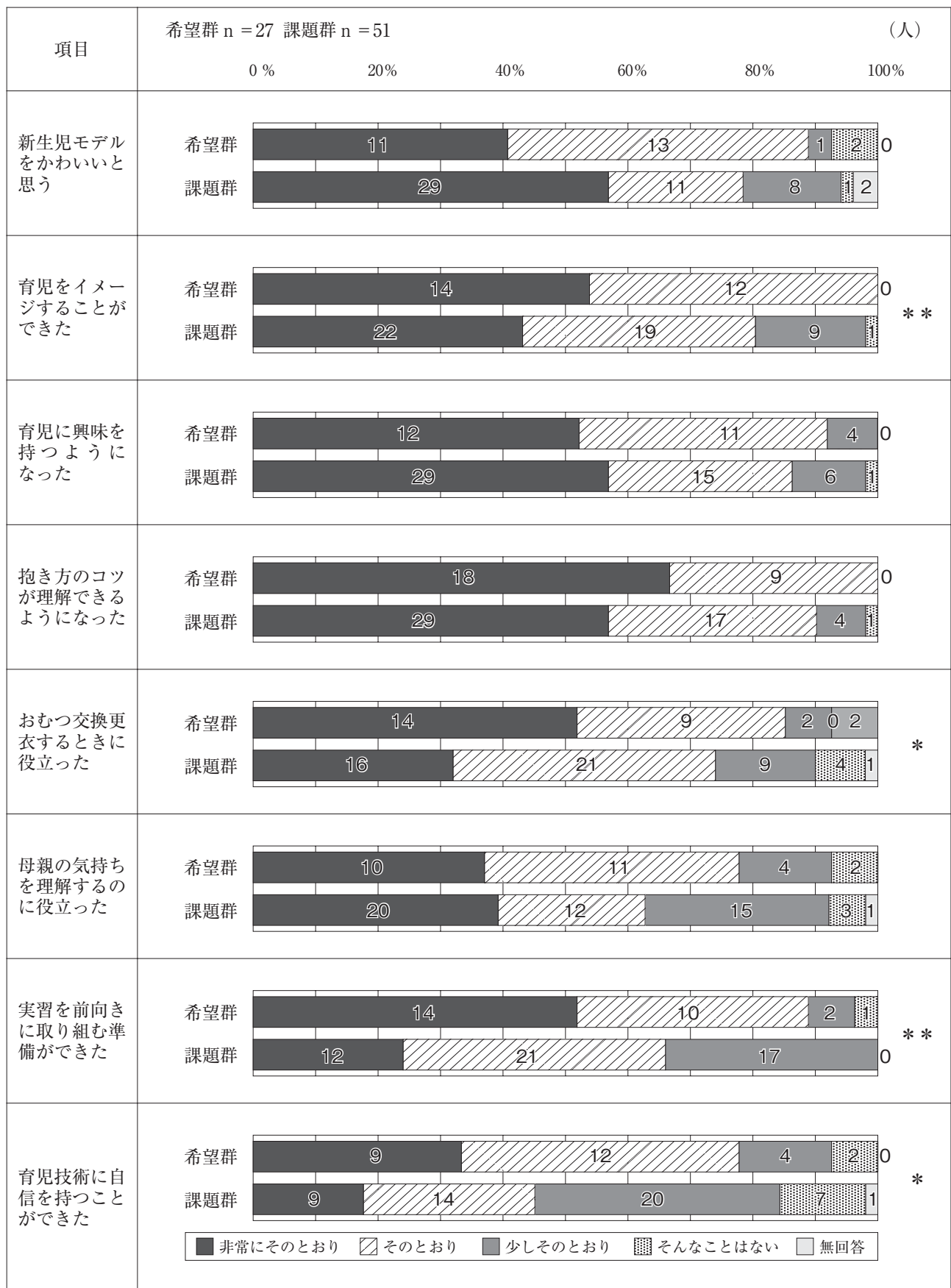
調査時期	育児擬似体験前 (母性看護実習前)	育児擬似体験後 (母性看護実習直前)	母性看護実習後
	平均値(点) ± 標準偏差	平均値(点) ± 標準偏差	平均値(点) ± 標準偏差
希望群 (n = 24)	$30.88 \pm 6.63$	$32.50 \pm 5.07 \uparrow$	$32.71 \pm 4.06 \uparrow$
課題群 (n = 51)	$29.94 \pm 6.14$	$30.24 \pm 6.03 \uparrow$	$30.70 \pm 5.60 \uparrow$

平均点の上昇：↑

表4 回避項目得点の変化

調査時期	育児擬似体験前 (母性看護実習前)	育児擬似体験後 (母性看護実習直前)	母性看護実習後
	平均値(点) ± 標準偏差	平均値(点) ± 標準偏差	平均値(点) ± 標準偏差
希望群 (n = 24)	$7.04 \pm 4.89$ *	$7.63 \pm 5.42 \uparrow$	$6.71 \pm 4.19 \uparrow$
課題群 (n = 51)	$11.25 \pm 6.31$	$10.43 \pm 6.95 \downarrow$	$9.77 \pm 6.90 \downarrow$

\* : p < 0.05 平均点の下降：↓ 平均点の上昇：↑



\* ; p &lt; 0.05    \*\* ; p &lt; 0.01

図1 育児擬似体験の気づき

得点)の変化を、①体験前、②体験後、③実習後の3時点において、「希望群」と「課題群」の2群で比較した。その結果、「接近得点」において、「希望群」は、①体験前 $30.88 \pm 6.63$ ②体験後 $32.50 \pm 5.07$ ③実習後 $32.7 \pm 4.06$ と3時点で徐々に上昇した。一方「課題群」は、体験前から「希望群」より1.48ポイント低い、①体験前 $29.94 \pm 6.14$ ②体験後 $30.24 \pm 6.03$ ③実習後 $30.70 \pm 5.60$ と3時点で徐々に上昇した。また、「回避得点」において、「希望群」は、①体験前 $7.04 \pm 4.89$ ②体験後 $7.63 \pm 5.42$ ③実習後 $6.71 \pm 4.19$ と②体験後に一旦回避感情が上昇するが、③実習後には①体験前よりも回避感情は低下した。一方「課題群」は、体験前から「希望群」より4.21ポイント高い、①体験前 $11.25 \pm 6.31$ ②体験後 $10.43 \pm 6.95$ ③実習後 $9.77 \pm 6.90$ と3時点で徐々に低下した。2群の調査時期における各得点の数値の変化量において、統計的な有意な差は認められなかった。しかし、2群間の比較においては、体験前の「回避感情得点」においてのみ有意な差が認められ、体験後には差は認められなくなった。

### 3. 育児疑似体験の気づき

育児疑似体験の気づきを「希望群」と「課題群」の2群で比較した(図1)。その結果、4段階評価にて【非常にそのとおり】【そのとおり】を含めた割合は、「希望群」においては、全ての項目が7割以上であった。一方「課題群」においては、「実習を前向きに取り組む準備ができた」と「育児技術に自信がもつことができた」の2項目は7割未満であったが、他の項目は7割以上であった。次に2群間を比較すると、「課題群」は「希望群」より【非常にそのとおり】【そのとおり】と回答した割合が全て低かった。「育児をイメージすることができた」「おもむつ交換、更衣するときに役立った」「実習を前向

きに取り組む準備ができた」「育児技術に自信がもつことができた」の4項目については2群間に有意な差が認められた。「課題群」の対児感情と育児体験の気づきの関係を示した(表5)。接近得点と相関が認められた項目は、「育児をイメージすることができた」「育児に興味を持つようになった」の2項目であった。

## IV. 考 察

### 1. 対象の背景

対象の学生は、平成19年度は27名、平成20年度は51名であった。背景を比較すると、性別、家族構成、乳児の世話体験においてはほとんど差がみられなかった。対象の特性として、2群ともに乳児の「世話体験がない学生」が半数以上みられた。対児感情は個人の生育過程を基盤として生成され発達するものと考えられる。また、女子大学生を対象にした調査では、乳児と多く接触した人は児に対する接近感情が高い傾向がみられると報告されている<sup>5)</sup>。これらのことから、乳児の世話体験のない学生には母性看護実習前に体験をおこなうことが必要と考える。次に、家族で暮らしている学生が多くみられるが、一人暮らしの学生が15%~24%を占めている。母親は、児の笑、泣きなどその児の反応に育児の楽しさや達成感を体感しながら育児をおこない、また育児をおこなうパートナーや家族とそれを共感することで、更に育児の楽しさが強化されると考える。しかし、一人暮らしの学生は、自身で家事をする必要があり時間的余裕もなく、また家族と共に育児疑似体験を楽しむことができる環境としては適切とはいえず、更に今回使用した新生児モデルは児の反応が得られないため、あまり効果的ではないと推察する。したがって自宅での体験は、学生の生活環境を考慮

表5 対児感情と育児疑似体験の気づきの相関

	かわいい	イメージ	興味	抱き方	おもむつ交換	母の気持ち	実習前向き	自信	沐浴	育児指導
接近得点	.175	.466 <sup>**</sup>	.347 <sup>*</sup>	.229	-.008	.247	.049	.004	.035	.127
回避得点	.143	.191	.245	.242	.276	.100	.097	.133	.302 <sup>*</sup>	.347 <sup>**</sup>

\* :  $p < 0.05$

\*\* :  $p < 0.01$

しながら進めることが必要である。植村ら<sup>6)</sup>は、育児体感赤ちゃんマイベビーを用いた育児擬似体験の演習効果のなかで、「体験人形が従来のモデル人形と違う点は、反応が示されることである。従来のモデル人形では学生の思いのままに世話をしても反応はなく、学生自身も練習を重ねてもこれでいいと思えない不確かなものであったと思われる。」と、マイベビーの活用の有用性述べている。今後、マイベビーの活用を含めた育児擬似体験を検討する必要がある。

## 2. 育児擬似体験した内容の時間および回数

体験した時間および回数を2群間で比較してみると、「希望群」のほうが「課題群」に比べると抱いた時間が長く、添い寝の回数が多かった。その他の項目については、あまり違いはなかった。また、2群ともにほとんどの学生が「抱く」体験を多く実施していることがわかった。動機が高い「希望群」の方が「課題群」よりも体験する時間や回数は多くなることは予測されたことであるが、抱く回数や沐浴、おむつ交換などの体験が、「課題群」と「希望群」もあまり違いがなかった。また、児を「抱く」体験が2群ともに多くみられた。これらのことから、授業の一環として一律に体験学習する場合も、希望した学生と同等の体験内容が可能であると考えられる。しかし、2群ともに体験の一つ一つの項目に対して時間や回数に幅があった。また、体験が簡単な項目（抱く）は体験が多く、体験が複雑で時間を要する項目（おむつ交換、沐浴、添い寝）は、体験が少ないあるいは体験がないこともあった。それは、オリエンテーションの不足なども考えられるが、自主的な体験学習は学生の意欲に大きく左右するものである。学内を離れた自宅での学生の持つ時間の制約や、家庭環境などの影響から体験の内容に差がでることも推測される。大塚<sup>7)</sup>は体験学習の効果として、「体験学習は個人でやるよりも数人のグループでやるほうが、効果的なものがたくさんあります。そこでも学びは相手の反応やフィードバックからの気づきで、自分では気づかなかったことに気づいたり、自分自身を客観的に見つめて自分の特徴を知ることができます。」と述べている。今回の自宅に持ち帰るという体験学習は、学生の自由な時間を使い、自分で納得するまででできることがメリットである。しかし、学生は授業で学習した演習内容が不明確で

あったり、自宅で実施しても育児技術の評価が得られず、特に体験内容に関心の低い学生には効果的ではなかったと考える。今後は自宅での体験学習とともにグループでの体験学習を取り入れた教育方法を検討することが必要である。

## 3. 育児擬似体験による対児感情の比較

「希望群」と「課題群」の接近得点は、2群ともに体験前、体験後、実習後の3時点で徐々に上昇した。体験をすることは長時間新生児モデルの側に居ることや、モデルではあるが「抱く」「おむつ交換」「添い寝」などの育児技術を実施する機会が増えるため、学生は「育児をイメージ」し「育児に興味をもつ」ことができるようになると思われる。つまり、児に関わる体験を重ねるごとに、接近得点が上昇する傾向にあり、児に対する接近感情が高まりやすいといえる。

「希望群」と「課題群」の回避得点は、「希望群」においては、体験後に一旦回避得点が高まるが、実習後には体験前よりも回避得点は低くなった。一方、「課題群」においては、体験前、体験後、実習後の3時点で徐々に低下した。これらのことから、「課題群」は、体験を重ねるごとに接近得点が上昇し、逆に回避得点が低下するため、体験をすることにより順調に接近感情が高まる傾向にあるといえる。しかしながら、「希望群」においては、体験後に一旦回避得点が増えている。これは、動機の高い学生であり、体験の内容を積極的に取り組み、実際「課題群」と比較すると時間、回数とも多く実施している。「希望群」の学生は、体験の気づきからも「母親の育児の大変さを理解するのに役立った」「母親の気持ちを理解するのに役立った」など、慣れない体験をすることで緊張や育児の負担を感じ、児に対してマイナスイメージを抱かせ回避得点が増えたことと推察する。濱<sup>8)</sup>が学習進行に伴う対児感情の推移を調査した結果でも、講義前と沐浴演習時を比較すると回避得点が高まると報告している。また、岡田<sup>9)</sup>は育児体感マイベビーの教育効果の調査で、育児の楽しさとともに大変さがあるアンビバレント性を現実に実感できると報告している。これらのことから、「希望群」は積極的な体験を通して、母親の育児負担の実感しつつ、児に対する接近感情も高める傾向があると推察する。

今回、2群の調査時期における各得点の数値の変

化量において統計的な有意な差は認められなかった。しかし、2群ともに児に関わる体験や母性看護実習において実際の新生児の看護体験を重ねるごとに、接近感情は高まりやすいといえる。

2群間の比較においては、体験前、体験後、実習後の3時点全てにおいて「希望群」のほうが「課題群」より、接近得点が高く、回避得点が低かった。また、体験前の「回避得点」においてのみ2群間に有意な差が認められ、体験後には差は認められなくなった。これらのことから、体験前は、「課題群」の方が「希望群」よりも回避感情は高いが、体験をすることにより「課題群」の回避感情は低下したといえる。「課題群」では、「新生児モデルをかわいと思う」「育児に興味を持つようになった」(図1)の2項目について、非常にそのとおりと回答している割合が「希望群」より高い。つまり、体験をとおして児に対する接近感情が高くなったことで回避感情が低下していると推察する。実際、「課題群」の接近得点が体験後に上昇し、回避得点が低下している。対児感情評定尺度は、対児感情を個人のうちに接近感情と回避感情との二次元の尺度でとらえているため、「課題群」の場合、体験することで両感情の拮抗がなく接近感情が上昇することで回避感情が低下したものと考える。これらのことから、育児擬似体験による対児感情の比較をおこなうと、育児擬似体験の前から、「体験を希望した学生」のほうが、「課題を一律に課した学生」に比べると、接近感情が高い傾向にあるが、育児擬似体験をおこなうと2群ともに接近感情は高まりやすいことが推察された。また、育児擬似体験をおこなうと、「課題を一律に課した学生」は、接近感情が上昇し、回避感情が低下することから、「体験を希望した学生」も「課題を一律に課した学生」も、育児擬似体験をおこなうことで、児に対する接近感情が高まりやすい。したがって児に対する負担感が緩和する可能性があり、母性看護実習の準備学習として効果があることが示唆された。

#### 4. 育児擬似体験の気づきの比較

体験の気づきを2群で比較すると、【非常にそのとおり】【そのとおり】を含めた割合は、「希望群」においては、8項目すべてが7割以上であった。一方「課題群」においては、6項目は7割以上であった。しかし、「実習を前向きに取り組む準備ができ

た」と「育児技術に自信をもつことができた」の2項目は7割未満であり、なおかつその2項目は2群間の比較においても有意に低かった。これらのことから、2群ともに体験をとおして児をかわいいと思い、興味を持ち、母親の気持ちの理解につながる。また、育児技術の習得に役立ち、育児をイメージすることができることから体験は効果があるといえる。一方、実習を前向きに取り組む姿勢や育児技術に自信を持つことに対しては、「課題群」は「希望群」より低く体験の効果があるとはいえない。しかしながら、「希望群」は、実習前から母性看護実習への動機が高く、体験を希望した学生であることを考慮すると、自己教育力が高い学生が多いことは予測される結果だろう。したがって、「希望群」も「課題群」ともに体験することは、母性看護実習の準備学習として効果があると推察される。ただし、実習の一環として全員におこなう場合は、学生の個々の課題に応じた学習支援が必要であると考えられる。

## V. 結 語

育児擬似体験の母性看護実習における準備教育としての効果を以下に述べる。

1. 育児擬似体験の前から、「体験を希望した学生」の方が、「課題を一律に課した学生」に比べると、接近感情が高い傾向にあるが、育児擬似体験をおこなうと2群ともに接近感情は高まりやすい。
2. 育児擬似体験をおこなうと、「課題を一律に課した学生」は、接近感情が上昇し、回避感情が低下する。
3. 育児擬似体験をおこなうと、「体験を希望した学生」の方が「課題を一律に課した学生」に比べると、育児擬似体験に対する気づきの割合は高い。しかし、2群ともに児をかわいいと思い、興味を持ち、育児技術の習得に役立ち、育児をイメージすることができる。
4. 「体験を希望した学生」および「課題を一律に課した学生」は、育児擬似体験をおこなうことで、児に対する接近感情が高まりやすく、また育児擬似体験に対する気づきがあることから、母性看護実習の準備学習として効果がある。

育児擬似体験は、母性看護実習の準備学習として

効果がある可能性が示唆された。しかしながら、学生の家庭環境や自己教育力などの違いにより、その効果が低くなる可能性もある。学生が母性看護実習に向けて自主的にできる体験学習方法の検討が課題となった。

### 謝 辞

育児擬似体験および調査に協力していただいた学生に感謝します。

### 引用文献

- 1) 佐原玉恵, 岸田佐智: 新生児の“泣き”に対する看護学生の気づき. The Journal of Nursing Investigation. 6 (2): 45-54, 2007
- 2) 植村裕子, 螢玲子, 松村恵子: 母性看護学における育児擬似体験人形を活用した演習効果. 母性衛生, 49: 107-113, 2008
- 3) 末永芳子, 原田なをみ: 新生児モデル育児擬似体験を通しての母性看護実習の効果に関する研究. 第39回日本看護学会論文集 (看護教育), 385-387, 2008
- 4) 花沢成一: 母性心理学. 医学書院, pp242, 1992
- 5) 前掲書4): pp79-85
- 6) 前掲書2)
- 7) 犬塚久美子: 体験学習. 分かる授業をつくる看護教育技法.」3, シュミレーション・体験学習, 藤岡完治, 野村明美編, 医学書院, pp142-144, 2000.
- 8) 濱耕子: 母性看護実習を習得する学生の対児感情の推移と関連要因. 母性衛生, 45 (2): 170-179, 2004
- 9) 岡田由香, 岡田奈純, 布施加奈, 他: 擁護性を高めるための教材の活用, 日本看護研究学会雑誌. 25 (3): 409, 2002

(平成22年2月1日受理)

## Effects of simulated childcare using an infant doll on maternal nursing pre-practicum exercise: differences due to the motivation to participate in the study

Yoshiko SUENAGA, Naomi HARADA

The purpose of the study was to examine the effect of practice that utilized a child care simulated experience doll in the maternal nursing. The study focused on its effects on nursing students' maternal nursing pre-practicum exercise.

The participants were third-year students in 2007 who volunteered to take part in the study-“volunteer group”, and third-year students in 2008 who took part in the study as a part of a pre-practicum exercise-“required group”.

An emotion-toward-infants rating scale survey was conducted three times: before the simulated experience, after the experience, and after the practicum. A questionnaire was also given after the maternal nursing practicum. The results indicated that the volunteer group tended to have higher approach feeling than the other group before the simulated childcare. However, both groups' approach feeling tended to increase each time they gained more experience in the childcare. By engaging in the simulated childcare the required group's avoidance score became similar to that of the volunteer group. Furthermore, the simulated childcare was found to help students understand mother's feelings, increase their interest in childcare, and learn childcare skills.

All these indicate that the simulated childcare is effective as a part of maternal nursing pre-practicum exercise.